

〈研究ノート〉

『普勸坐禪儀』ノート（その二）

神 戸 信 寅

法という「行い方」は如何にあるべきかを見てみたいと思う。

第二章 正しい坐禅の威儀作法

『普勸坐禪儀』における、この第二章は、さきの第一章において説かれた立場を踏えて、もっぱら「正しい坐禅の威儀作法」という坐禅の「行い方」を中心にして説かれている。そして、この第二章が『普勸坐禪儀』の「本論」となつていていることが、また禅師の坐禅に対する姿勢をよく示してくれているのであって、そこには、坐禅を伝えることは単に抽象的なことを伝えるのではなく、具体的な仏祖の坐禅の「行い方」を実際に行じ伝えるところに坐禅の坐禅たり得るものがあるということが窺えるのである。

そこで、坐禅の威儀作法を説いているこの第二章を本文にそつて漸次理解するに、ひとまず、**參禪の心得・坐禪の要術・坐禪の世界・坐禪の力**、と区分して坐禅の威儀作

參 禪 の 心 得

第六段（本文）

夫參禪者

静室宜焉、飲食節兮。

放捨諸縁、休息万事。

不思善惡、莫管是非。

停心意識之運轉、止念

想觀之測量。

莫圖作仏、豈拘坐臥

拘わらんや。

（訓練）

夫れ參禪は、

静室宜しく、飲食節あり。

諸縁を放捨し、万事を休息

して。善惡を思はず、是非

を管すること莫れ。

心意識の運轉を止め、念想

觀の測量を止めて。作仏を

図ること莫れ、豈に坐臥に

（字解）

△夫參禪者。夫は第一段の「夫」と同じく改まつた氣持で文を起す発端のことば。參は古くは「參」で「晶（星の象形）」と「參」の合字。三に通じて三つ、交わるの意。三が一二三と數の「三」を意味するのに対し、參は二つある所へ交り入ることを意味する。例えば、參加・參列等のようにその仲間、その席に入りつらなる意として用いられる。禪は *jhāna* (*dhyāna*) の音訳。「禪源諸詮集都序」

には「禪とは是天竺の語、具さには禪那と云い、中華に翻じて思惟修と為す。亦靜慮とも名づく。皆定慧の通称なり。」（岩波文庫本一五頁）とあるように旧訳では「思惟修」、新訳では「靜慮」と訳されている。また「定慧」「禪定」と通称されているように、禪は思慮（慧・觀）の働きと三昧（定・止）の働きの意味が含まれている。そこで、禪の理想的な状態を「定慧等学」「止觀均等」としている。『正法眼藏』「仏性」には「いわゆる定慧等学の宗旨は、定学の慧學をさへざれば、等学するところに明見仏性のあるにはあらず、明見仏性のところに定慧等学の學あるなり。」（岩波文庫本三三六頁）とあって、「定慧等学」から「明見仏性」へではなく、「明見仏性」があつて「定

慧等学」があるとしている。△參禪は禪道に入つて学ぶことであるが、高祖においては『正法眼藏』「坐禪儀」に「參禪は坐禪なり。」といつてゐるよう、「坐禪」をすること、臨済宗では入室独參のことを「參禪」とといつてゐる。「行も亦た禪、坐も亦禪」で知られる「證道歌」に「江海に遊び山川を涉り、師を尋ね道を訪うて參禪を為す。」（築摩書房・世界古典文学全集『禪家語錄』二七頁下）とある。

△静室宜焉。静は動・躁に対する「しづか」で安・息の意。室は「宍（いえ）」と、そこにいたりて止むの意の「至」より、物を藏め実つる所、家の表を「堂」として物を置かないのに対し「室」は裏にて物を実つ。転じて、家、部屋の意。宣は「宍」と「一」と多の省画「夕」の合字で、地（「一」）に家を建てて安居する意。転じて、よろし、好ましの意。△静室宜焉△瑩山禪師は『坐禪用心記』で、坐禪をするに好ましい場所を「道場は須らく清潔なるべし」「坐禪せんと欲せば静處宜しく」と述べ、更に風の烈しき處、高頭の處、極明・極暗・極寒・極熱乃至遊人・戯女の處、風煙・雨露の侵入する處といった場所を避け、叢林の中、善知識の處、深山幽谷・綠水青山・谿邊樹

下の處といった具合に、具体的に述べられている。『天台小止観』には「静處に閑居せよとは、衆事をなさざるをこれを名づけて閑となし、慣闊なきが故にこれを名づけて静となす。」（岩波文庫本、三八頁）とあって、更に聚落から三里は離れているべきであるとしている。三里は離れているべきということは、三里以上ならいくら離れていてもよいというのではなく、三里程度離れていれば慣闊なく、托鉢するにも適当であるとみたのであろう。焉は語調を強める助辞。

△飯食節矣。飲は「食」と「欠（息をする意）」の会意で、呑が物を丸のみするのに対し、飲は湯水等をのむ意。食は「𠙴（集合の意）」と「良（一説米の一粒なりといふ）」で集米の意。転じて、くらう、養うの意。自筆本（天福本）には「浪」とある。浪はもと浪とかき、飲食すること、転じて物事のくぎり等の意となる。矣は「曰（語の止む意。）」と飛んで行って一定の場所に止まる意の「矢」との会意形声で、断定または、過去を示す意。ここでは焉と同じく、助辞で強く断定する意。△飲食節矣▽は「静室宜焉」が坐禅をする外面的注意であるとすれば、これは内面的注意を述べたものとしえる。『坐禅用心記』に

は「食を節量すべし。節量食は、謂く分を涯るなり。三分の中二分を食して一分を餘すべし」とある。

△放=捨諸縁。放は「支」と「方」の形声で、逐いはなつこと。打棄て除くことの意。捨は「手」と「舍」の形声でうちすること。諸は「言」と「者」の会意形声で、此者は此者、彼者は彼者と異を別ち辨ずる意であつて、接頭語的に用いられ、もろもろ、多くのといった意となる。縁は「糸」と「家」の形声で、衣服のへりによりそうことから、その筋の通りに行く意。物事にすがりよること。因に通じて関係・ゆかり等の意。仏教では原因を資助して結果を生じさせる作用の意。△放=捨諸縁▽『坐禅用心記』には「諸縁を放下し」とある。境に対するもうもろの執われを放ち捨てること。

△休=息万事。息は「自」と「心」の会意で、心より発して自（鼻）より出づる氣（呼吸）の舒なることを息といふ。このことから心と氣の親密なることを感じとることができる。『天台小止観』調和第四（岩波文庫七五頁以下）には「息を調うるにおよそ四相あり。一に風、二に喘、三に氣、四に息なり。」として、風・喘・氣・息について説明している。それによると「風」は「鼻中の息に出入の声あ

るを覚ゆるなり。」とあり、「端」は「声なしといえども、しかも出入が結滞して通ぜざる」とあり、「氣」は「声なく結滞せずといえども、しかも出入の細ならざる」とあり、「息」については「声あらず結せず^{靈應}ならず、出入綿綿として存するが」とくなきがごとく、身を資けて安穩に、情に悦^{えうぢよ}予を抱く。」としている。休息は休止すること。万は千の十倍の教、また多数の意。万事はあらゆること。

△休_ニ息_ニ萬事_ニは「聞解」に「外ヲ放捨シ、内ヲ休息スレバ、安樂ノ境界現前ス、」と説いているように「放_ニ捨_ニ諸縁_ニ」が外に対し、もうもろの相対関係を放ち捨てていくこととすれば、「休_ニ息_ニ萬事_ニ」は内に対し、あらゆる相対関係が造作されないよう休止するの意としている。どのように「休息」していることかといえば、「休息」の息が心より発して鼻より出づる氣のことであることから、氣（呼吸）と心とが一つに休止していること。呼吸を中心と考えれば、心が呼吸（息）から離れて思量分別の心となることをやめることといえよう。要するに「放_ニ捨_ニ諸縁_ニ」、休_ニ息_ニ萬事_ニ」は參禪にあたつての「身構え」といった心得を述べたものである。

△不_レ思_ニ善惡_ニ。思は「凶（脳）」と「心」の合字で、心に慮ること。善は古くは「蠶」で、「羊」と「誠」の合字で、正理にかなったこと。転じて、悪に対してもよいこと。惡は姿の醜き意の「亞」と「心」の合字で、心様のあしき意。△不_レ思_ニ善惡_ニは心中において善惡を相対的に思ひ量らないこと。『正法眼藏』「坐禪儀」には「善也不思量なり、惡也不思量なり、」とある。

△莫_レ管_ニ是非_ニ。莫は「日」と「舛」の会意で、日が草の中に没せし形で、日がくれてなくなる意、転じて、なし・くらし・むなしきこと、また助動詞として用いられて、なかれ・なからんやと訓む。管は広く楽器・円筒形のもの・くだといったものから、わくの中にとりしまる（管轄）、見る（管見）こと。是は「日」と「正」から、道理にかなつたこと、正しいこと。非は鳥の飛下する時の兩翅の象形から、左右相背きて相反する否定の意。悪しき事。△莫_レ管_ニ是非_ニは「不_レ思_ニ善惡_ニ」と同じ意で、よしあし・正邪を心のわくの中で思ひ見ないこと。

△停_ニ心意識之運転_ニ。停は中途にして止まること・暫くやむこと、また待たすことの意。意は「音」と「心」の合字で、心と思うことが音声になつて知ることができるところ

から、物を推量し、思いやる」と。志の発動する」と。識は言扁から、言語によって道理を納得し覺知する」と、事物をはつきり分別知得することと、心意識は心（吾我）との作用の」と。『聞解』には『摩訶止觀』を注釈した

天台第九祖湛然（七一—七八一）の『止觀輔行』を引用して、「対境覺知、異乎木石」、名為心、次心籌量名為意、「了別知為識」、と粗より細に區別して説いてる。一般には集起を義とする心（質多 citta）、思慮を義とする意（末那 manas）、「別を義とする識（毘若底 viññāna）として説明してある。（宇井仏教事典）。運は移り徒ること。転は車のめぐるいと。《運転》は止み間なくめぐりはる」と。はたらきの」と。

△止念想観之測量。止は草木の芽を出した時の根ると、または足首の象形と。後世、足を加えて趾とし、止をとどまる意と。転じて、物事を中止するいと、じつとやみとどまる」と。念は心中に常に思ひをもつ」と。想は心におもひやる」と。觀はくわしく見る」と、心中に思い浮べて分別する」と。《念想観》は心におもひ浮んだ思慮分別（測量）の面を粗より細へと述べたもので、「心意識」が心の動き働き（運動）の面を粗より細において述べてい

ると、それぞれ対をなしている。測は水の深さをはかること。転じて、広く測度のこと。《測量》は、ここでは心の中で念想観を依り所として思慮分別すること、思い測り知る」と。

△莫図作仏、図は差図して計画する、企てる」と。作はつくりなす」と。《作仏》は仏になること。『正法眼藏』「見仏」には「成歎迦牟尼仏するも成道作仏といふなり、」とある。ここでは、坐禪をして成仏しようと企てる」と。この「莫図作仏」について『聞解』は『景德伝灯錄』南嶽伝をあげて、この語の出處としているように、南嶽懷讓（六七七—七四四）と馬祖道一（七〇九—七八八）との「磨坊作鏡」の話を背景としたものであって、禪師は『正法眼藏』「古鏡」「坐禪箴」の巻等にこの話をあつかい述べている。

△豈拘坐臥。拘は手にて止む」と、こだわること。臥は横になりやすむこと。《坐臥》は行住坐臥（四威儀）の坐臥のこと。《豈拘坐臥》は參禪（坐禪）の坐が一般にいう四威儀の坐とが臥に執われたものでなく、「坐臥を脱落すべし」（『正法眼藏』「坐禪儀」）とあるように脱落の坐、不染汚の坐の意。」の」とは參禪（坐禪）が坐のみにとどま

『普勸坐禪儀』ノート（その二）（神戸）

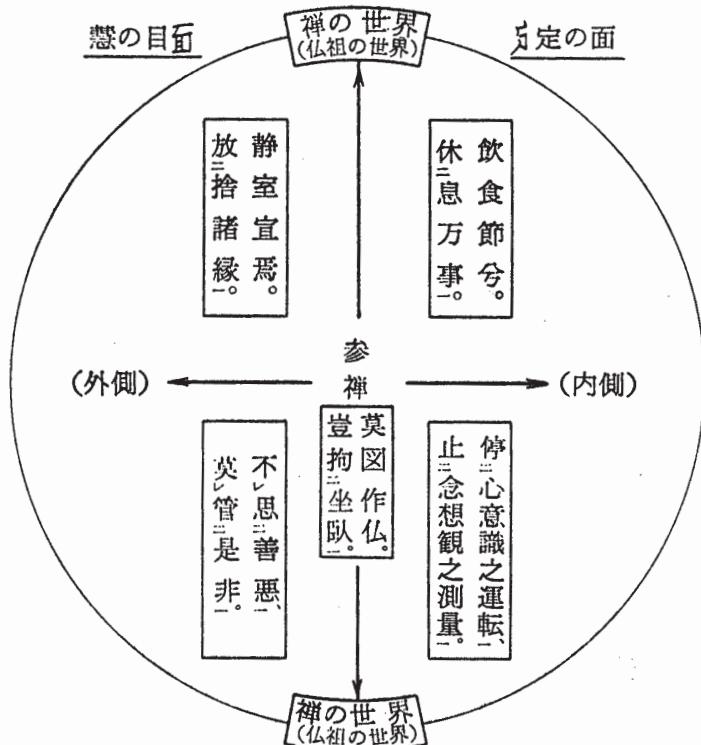
らず、日常一切の動作が参禅（坐禅）につながっていることを意味しているといえる。

（ノート）

第二章の最初であるこの段は「参禅」に際して内外にわたり心得を示されたものであるが、これを図に示せば、第六図のようになるであろう。即ち、「参禅」の心得として、まず身的に外に対するのが「静室宣焉」・「放捨諸縁」であるとすれば、内に対しては「飲食節兮」・「休息万事」がこれに当るといえよう。また、心的に外に対するのが「不思善惡」・「莫管是非」であるとすれば、内に対しては「停心意識之運転」・「止念想觀之測量」がこれに当るといえる。

しかしながら、「参禅」それ自体においてみれば「莫圖作仏」の「參禪」でなければならないので、むしろ「参禅」にあっては心得のないことが「参禅」を「參禪」たらしめるものといわねばならないであろう。そこに、釈尊の開かれた悟りの世界、そして、祖師方が正伝してきた、いわゆる正伝の仏法というべく「仏祖の世界」が開かれるとするのが、禪師の説く「參禪」の眼目である。してみると、「静室宣焉」乃至「止念想觀之測量」といった内外

第六図（参禅の心得）



にわたる心得は不要のものかといえ、そうではなく心得は单なる心得ではなく「莫図作仏」の「参禅」→「仏祖の世界」の本來あるべきあり方を内外に示しているものとしてみることのできるものである。そして、こういった内に示されたあり方は「豈拘ニ坐臥」で、何も坐臥といつたことに限定されたものではなく、何時でも何處でも誰にでも全てに行きわたった普遍的なあり方であるとみなされ得るのである。また、こういったあり方は「参禅」を中心

に右側の内に向った面に対しては「定的」なあり方を左側の外に向った面に対ては「慧的」なあり方を示しているものとも見ることのできるものである。

坐 禅 の 要 術

第七段（本文）

（訓詁）

尋常坐處には、

厚敷ニ坐物、上用蒲團。厚く坐物を敷き、上に蒲團或結跏趺坐、或半跏趺坐。或は結跏坐趺、或は半跏趺坐。

『普勸坐禪儀』ノート（その二）（神戸）

謂

結跏趺坐、先以右足安ニ左脛上、左足安ニ右脛上。半跏趺坐、但以左足一压ニ右脛矣。

寛繁ニ衣帶、可レ令齊整。

半跏趺坐は但左の足を以て右の脛を压すなり。寛く衣帶を繋げて齊整ならしむ可し。

次

右手安ニ左足上、左掌

次に

安ニ右掌上。両太拇指、面相拄矣。

乃正身端坐、

不得ニ左側右傾前躬後仰。拄う。

要レ令耳與レ肩對鼻與レ臍

乃ち正身端坐して、

対レ舌掛ニ上脣、唇齒

左に側ち右に傾き前に躬ま

相著。目須ニ常開、鼻息

り後に仰ぐことを得され。

身相既調、欠氣一息、

耳と肩と対し鼻と臍と対せしめんことを要す。舌上の

左右搖振、兀々坐定。

脣に掛け、唇齒相著け。

思ニ量箇不思量底。

目は須く常に開くべし、鼻

謂く

結跏趺坐は、先ず右の足を以て左の脛の上に安じ、左の足を右の脛の上に安ず。

半跏趺坐は但左の足を以て右の脛を压すなり。寛く衣

帶を繋げて齊整ならしむ可し。

不思量底如何思量。

息微に通じ。

非思量。
此乃坐禪之要術也。

身相既に調えて、欠氣一息
し、左右搖振して、兀兀と
して坐定して。

箇の不思量底を思量せよ。

不思量底如何が思量せん。

非思量。

此れ乃ち坐禪の要術なり。

(字解)

△尋常坐處。常は音符の「尚」と「巾」の形声で、尋の二倍、一丈六尺の意。また、平常の意、更に不变の意。

△尋常は「八尺曰尋常」から尋常を普通・通常・常・なみといった意。△坐處は坐禪する場所のことであるが、『正法眼藏』「坐禪儀」に「坐禪のとき、袈裟をかくべし、蒲団をしくべし。」ともある。

△厚敷坐物。厚は薄と対し物のあついこと。また温厚・情厚などとも用いる。敷は上に物をのせるように下面にむらなくしきのべ拡げること。物は、「者」があれはこれはと立分けるのに対して天地間のあらゆるもの之意。牛扁のは、当時牛が最も重宝がられ形も大なることから代表的

に用いられたという。△坐物は坐禪をする時に用いる敷物で、藁・蒲・菅・蘭・蔦などの茎葉で渦のように円く平らく組んだ敷物。今日いうところの方形をした「坐蒲団」がこれにあたる。『正法眼藏』「坐禪儀」に「坐禪は静處よろし、坐摩あつくしくべし。……かつて金剛のうへに坐し、盤石のうへに坐する蹤跡あり。かれらみな、草をあつくしきて坐せしなり。」とあるように、「坐摩」のことである。

△上用蒲団。上は古くは「一」とかき、一定の場所（「一」）より高きを指す意。団は「口」と音符の「專」の合字で、一処に寄集つてまるい意。△蒲団は蒲草をまるく組んだもの、『正法眼藏』「坐禪儀」に「蒲団は、全跏にしくにはあらず、跏趺のなかばよりうしろにしくなり。しかあれば累足のしたは坐摩にあたれり、脊骨のしたは蒲団にてあるなり。」とあるように、坐摩を一般にいうところの方形をした坐蒲団とすれば、「蒲団」は坐蒲団ではなく、「坐蒲」と一般にいっているものである。直径一尺二寸周囲三尺六寸、その形円く蒲の穂を布で包んで造ったもの。△或結跏趺坐。或は「オ」を取り「口（国境）」「一（土地）」を守る意から、外敵の侵入を疑う意に至り、更に接

続詞としてある時はの意に用いる。結は糸にて締ぶことから、むすぶ意。趺は足を屈して坐すこと。また、足の裏の意ともいう。趺は足の甲、また、足の表の意ともいう。

「跏趺」で足を組んで坐すこと。△結跏趺坐は「趺を結ぶ坐」の意で、足の甲と足の甲とを脛の上に結び合わせる坐法のこと。『聞解』には「結加趺坐ハ、両方ノ足ノ甲ヲ、結ビ加エテ坐ス」と「結跏趺坐」を「結加趺坐」として「趺を結び加える坐」の意にしている。半は物を中分する意。「八」から分つこと。△半跏趺坐は片足を他の足の脛の上に組んで坐わる坐法である。『聞解』に「半加趺坐」ハ、結バズニ加ルユヘニ、結ノ字除ク、「」としている。結跏趺坐を如来坐というのに対して、半跏趺坐のことを菩薩坐といふ。

△謂「結跏趺坐、先以三右足安三左脛上」、左足安三右脛上。謂は心に思うことを直に口述すること、また、此様にいわれているといいきかす意。先是「之」と「人」との合字で、さきんじ進む意。右は「少（右手の形）」と「口」の合字で、古くは「弔」と書いた。足はくるぶしより下のこと。これに對して甲の上膝の下までを「脚」、膝より上を「股」という。安「之（いえ）」の中だ「女」の居るところ

ろから、安寧・安樂の意。危ぶなげなきこと。更に、静止、しつとりとおちつくこと。左は「レ（左手の形）」と「エ」の合字で、右の対である。脛は股のこと、内を股、または腿とかくのに対して、外を髀とかく。」では内股のこと。

△半跏趺坐、但以三左足安三右脛矣。但はもっぱら、ひたすら、只、單にの意。压は上より地に迄抑へつくようおすこと。矣は「目（語の止み尽きる意）」と「矢」の合字で、語の末尾に用いて断定、また、過去を示す意。△謂、結跏趺坐、先以三右足安三左脛上、左足安三右脛上。半跏趺坐、但以三左足安三右脛矣。△は坐禪に吉祥坐・降魔坐とあるうちの「降魔坐」の坐禪のし方を示したものである。『禪林象器箋』の第十類・礼則門「結跏趺坐」の項には「凡坐皆先以三右趾押三左股。後以三左趾押三右股。此即左押レ右。手亦左居レ上。名曰「降魔坐」。諸禪宗ハ多伝此坐」と諸禪宗の多くが伝えていいるところの「降魔坐」を述べている。また、「吉祥坐」について「先以三左趾押三右股。後以三右趾押三左股。令三足掌^{ラシ}於二股之上。手亦右押レ左。仰安三跏趺之。名為「吉祥坐」。」と述べている。そして「如來昔在菩提樹下。成正覺時、身

安三吉祥之坐。手作三降魔之印。」と述べて、足が吉祥坐をしている時も、手は降魔の印を作っていたことを述べている。『宝慶記』には如淨和尚の言葉として「若坐久疲労、改々右改々左無レ妨。」とある。要するに足を吉祥坐にしようが降魔坐にしようが妨げ無しというように、足の組み方については個定化されていないようである。むしろ、半跏趺坐の場合は、どちらか一方により多く肉体的負担がかかりやすいといった見地からすれば、「改々右改々左」ということが体質的には必要かもしれない。しかし、「半跏趺坐」より「結跏趺坐」の方が安定しているから「半跏趺坐」は「結跏趺坐」の略式といったものではいえないであろう。なんとなれば、禅師は「結跏趺坐」を左足を上にした降魔坐において示しているのであるが、これを略した「半跏趺坐」にすれば、左足をはずすこととなって右足を上の「吉祥坐」になるのであるが、禅師の説く「半跏趺坐」は左足を上のやはり降魔坐を示している。このことは『天台小止観』のように「半跏坐（半跏趺坐）」から「全跏坐（結跏趺坐）」へ、「全跏坐」から「半跏坐」へといった略式から本式へ、本式から略式へということを意味したものではなく、「結跏趺坐」も「半跏趺坐」も共に「正

身端坐」としての仏祖の坐禅が全とうされているものといった氣持がそこにこめられているのであろう。

△寛繫三衣帶。寛は家の広大なる意から、転じて、物事のゆつたりし、ゆるやかなこと。繫はつなぎとめること。結びしめること。衣は人が衣を著た象形で、きものこと。▲衣帶▽は衣服を着、帶を結ぶこと。

△可レ令ニ齊整。可は宜しと肯い承諾する意。ここでは、助動詞として当然の意。否と対すること。令「はム（合）」と「ロ（節度割符）」の合字で、割符を合することから、上に立つ人の下命戒告をいう。転じて、命に服従せしむる意。助動詞としては他に動作をなさしめたり、ある状態に至らしめる意。齊は禾麦が穂を吐き穗先が揃つて等しいこととの象形から、物の先を切揃へた様に行儀正しいこと。整は束ねて散漫を防ぐことの「束」と、支えてこれを正すこととの「支」と、音符としての「正」との合字で、齊しくととのえること。▲齊整▽はととのえそろえること。

△次右手安三左足上、左掌安三右手上。次はそのつぎの意の「二」と疲れし時に発す「欠（あくび）」の合字で、不精・進まず・止まる等の意となり。転じて、順序・位置等次第に相うけて後に並ぶこと。掌は手心、手のひらのこと。

△両太拇指面相拄矣。両は平分の意の「一」と、彼とは是れとならぶ意の「匂」の合字で、ふたつ・ならぶの意。太は大に同じ、ここではふとい意。拇指は手足の最も太い指。△太拇指は親指のこと。相は「木」と「目」と合せて詳しく述べる意から、省視・觀察の意。転じて、人相等吉凶を占い見る意。接頭詞としては互に、共々に等一つの事柄と共にかかわる意。挂は旁より支えること。支柱。自筆本には「柱」とある、柱は直立して上の屋宇を支える材、はしらのこと。△次右手安_ニ左足上、左掌安_ニ右手上。両太拇指、面相枉矣。△までは、手の組み方を示したもので、右手を下に左手を上にして掌を上に重ねるのを降魔の印といい、逆を吉祥の印といい、そしてこの手の組み方を法界定印という。『正法眼藏』「坐禪儀」には「右手を、左足のうへにおく、左手を、右手のうへにおく。ふたつのおほゆびさき、あひささふ。両手かくのことくして、身にちかづけておくなり。ふたつのおほゆびの、さしあはせたるさきを、ほそに対しておくべし。」とある。

△乃正身端坐。乃是上文と下文との継目におき、上を承け下を起す語。「そこで」の意。正は「一」と「止」の合字で、一を守つて止る意にて直き道にあること、道に合する

意。また、中正であつて歪みなきこと。端は「立」と「端」の形声で、立姿の正しい貌。きちんととしている意。△正身端坐は身を正して、きちんと坐すこと。『永平広録』第五には「衲子坐禪、直須_ニ端身正坐為_ニ先。」とある。「端正坐」については『天台小止觀』調和第四に「端正坐すること、なお_テ石の_ビごとくなるべし。」（岩波文庫本七五頁）とある。

△右側左傾。側は片寄った處、また傾く意。傾は頭正しからざる貌の「頃」と「人」との合字で頭をかたむくこと。転じて、一般に物の一方に偏する意。

△前躬後仰。前は「舟」と「刀」の合字で、「刀」から物をそろえて切断する意。のち「舟(進)」の意を取り進み行く意となり、そろえて切る意には揃・剪等を用いる。後の対、向へよる・手前へ寄す意。躬はもと船(呂は脊背)とかき、人の身体のこと。△前躬は前にまるく屈まること。勿論、身体が前に傾くことも含まれている。後は「イ(歩む)」と「タ(幼者)」と「タ(歩みの遅い意)」の合字で、歩むこと遅くて人におくれる意。転じて、前の対である意。仰は「イ」と「印」の合字で、首を挙げてあおぎ望むこと。

△要令。要是体の中央である腰に由（両手）をあてた貌で、体を支持する大切な所より、要処・要点・必要等の意に用いる。

△耳與肩対。耳は耳の象形。而已に通じて語に添うる辭ともなる。與は手を四つ集めた形の「昇」と「与（納むる意あり）」との合字で、共に相くみ合う意。肩は臂の本である肩の形をとる「戸」と「肉」の合字で、肩の意を表わしている。対はもと「對」とかく、「莘」は草木の盛なること。「口」は言語、「寸」は法則の意。こたえ酬ゆる意から相対して向い合うこと。鼻はもと「自」が鼻の形を象り、のちこれに音符の「界」を加えて用いるに至った。臍は胞を繋ぎし痕。転じて、へそのこと。ここまででは「正身端坐」の心得をのべたもの。

△舌掛_三上脣。舌は「千」と「口」の合字。「千」は声が舌を犯して出で、食物が舌を犯して入るというように、「犯す」意から、物を言い味を知る舌のこと。掛はト筮の時、箸を小指の間にかけ置くことから、物を釣等に釣り下げる」と。脣ははぐき、はにのく」と。△舌掛_三上脣△は宗蹟の「坐禪儀」、瑩山禪師の「坐禪用心記」には「舌挂_三上脣」となつてある。

△唇齒相著。「唇齒相著ハ、上の唇ト下ノ唇トアヒ著ケ、上歯ト下歯トアヒ著ク、」（「聞解」）とあるように、口をつむることである。

△目須_ニ常開。常は裳と同義で、もすそのこと。また、恒の意に用いて、久し・変らず・平常・常住のこと。開は門を張りひらくこと。次第次第にあきひろくなること。ここでは、「坐禪用心記」に「眼須_ニ正開、不_レ張不_レ微」というように、自然に開いている状態である。『宝慶記』には「若四五十來年慣_ニ習坐禪、渾不_ニ会低頭瞌睡者、閉_ニ眼目_ニ坐禪無_レ妨。如_ニ初學未_レ慣者、開_ニ目坐。」とある。

△鼻息微通。微はしのび行くこと。転じて、わずかで認めにくしさ。猶_レ無_レということ。△鼻息微通△を「聞解」では「我モシラヌ様ニ、鼻息ノ出入スルヲ云フ。」としている。鼻息は『坐禪用心記』に「鼻息可_ニ任_レ通而通_ニ也」とあって「長息則任_レ長。短息則任_レ短。」としている。また『永平広録』第五にも「所謂知_ニ是息長、是息短、乃大乘調息之法也。息至_ニ丹田、還從_ニ丹田_ニ出、出入雖_レ異、俱依_ニ丹田_ニ而入出。」とある如くである。そして、長は長、短は短と息が鼻から微に通じれば「調心易_レ得也」で心が容易に調えられるとしていることから、「鼻息微通」

といふの中に「調息調心」といふことが含まれている

といえる。

△身相既調。既は尽くる意。また、そこ迄行き届きつくこと。調は言扁より聲音の和合すること。転じて、物事の和合しととのう意。△身相既調を自筆本では「身相既定、氣息亦調。」とあり、『正法眼藏』「坐禪儀」には「かくの」とく身心をととのへて、「とある」とから「身」「息」「心」とが一つに調和していることといえる。

△欠氣一息。欠は人の頭より氣の立上る意より、あくびのこと。△欠氣一息は氣を一と息に吐くこと。「坐禪用心記」には「欠氣安息。所謂開口吐氣、一両息也。」とある。また、「聞解」には「タメ息ヲフキ出スナリ、」とある。いわゆる深呼吸して、息を安定させることである。

△左右搖振。搖は動くこと。振はふるい興すこと。△左右搖振は身を左右に時計のふりこのようにふり動かすこと。坐定する時は大より小に振りこんでいく。

△兀兀坐定。兀は「一」と「人」の合字で、高くして上の平なる意。△兀兀は動かざる貌。定は「ウ」と「正」の合字で、人が屋下にあって安定正坐の意。仏教では三昧で落付くこと。三昧はsamadhiの音訳で等持などと意訳し

ている。

△思量箇不思量底。思は「凶(脳)」と「心」の合字で、心に慮ること。△思量は思いはかること。箇は一枚二枚と物を数えること。また、ひとつの意、代名詞としては、この・これの意。底は「ト」と「岳」の合字で、人の至り止まる處。また、無意味の助字。△不思量底は思いはかることのない世界。△思量箇不思量底は『永平廣錄註解全書』の中の「光湯」には「コレハ思量ニタレナク、ナニモナキハ不思量ナリ」といっていることにより、文字通りに、思量はこれ不思量(吾我なき思量・不の思量)なりの意。ここでは、調心・調息をもって調身し、「正身端坐」に向けて工夫辨道すること。この「思量箇不思量底」から「……非思量。」に至る問答は『景德伝灯錄』卷一四薬山の章などにみられるもので、禅師も薬山におけるこういつた非思量の世界を『正法眼藏』「坐禪儀」などにて拈提されている。

△不思量底如何思量。如は「女」の「口(言)」は従順にして逆わないことより従う意。転じて、ことしの意。また、疑問の辞。△如何は、いかに、どうしてといった疑問の語。△不思量底如何思量は『永平廣錄註解全書』の「光湯

湯」に「如何思量ハ不思量底ノ思量ヲ不審ニオモヒテ、如何ト問訊スルニハアラズ。如何トハ思量ニ彼此ナク、能所ナキヲ思量トイヒ、不思量トイフナリキ」と「不思量」を能所なき「如何思量」の意としているが、文字通りに「如何」を問訊の意にみれば、「不思量（吾我なき思量・不の思量）」とは「如何」なる「思量」であるかの意で、吾我なき処に向うには如何にあるべきかという意ともなる。

△非思量。△非思量は思慮分別することにあらざること。すなわち、吾我なき処を思量することは吾我による思量分別の外であるところの威儀作法に依つて示すこと。ここでは、威儀作法の調つた正身端坐にあることを「非思量」という。『正法眼藏』「坐禪儀」には「不思量底を思量するには、からず非思量をもちあるなり。」とある。

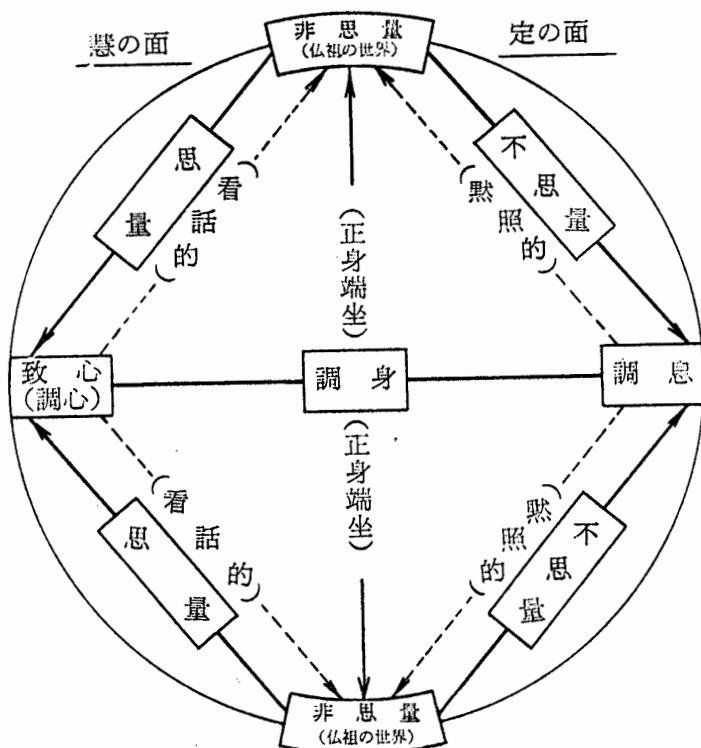
△此乃坐禪之要術也。此は「止」と「ヒ(比)」の合字で、比べ止まる処の意から最も近い場所・事物を指し示すに用いる。また、「提示した語句を再度述べるに使う。ここでは、「非思量」をいう。術は「行」と音符の「求」との合字で、人の歩み行く道の意。転じて、人の由る所・道理・てだて・方法。△要術は最も大切な道・あり方の意。また、要と術とから、目標とすべき最も大切なことと、その

方法・道という二面をみることもできる。『正法眼藏』「坐禪儀」には「これすなはち坐禪の法術なり」とある。「法術」も真理そのものと、方法の意とが含まれたものと解せられる。也は口より氣の出る貌より、語の余勢のこととで、決定・発語・疑問・詠歎・呼掛等に用いられる。ここで、決定・断定の意。

(ノ)ノート

この段は坐禪の行い方を主に説かれている。そして、その行い方は「正身端坐」、そして「非思量」といったことに集約されているといえよう。「正身端坐」は「調身・調息・致心(調心)」と、「非思量」は「思量・不思量」といったこととの関連の上にあるわけで、いまこれを図に示すと第七図のようになる。そこで、まず「正身端坐」であるが、「正身端坐」は「調身」が「調息」「致心(調心)」を左右にしているのに対して、「仏祖の世界(非思量)」に向い、そして「調息」「致心(調心)」を「仏祖の世界(非思量)」としてその内に包み込んでしまっている。すなわち、「正身端坐」においては「調身・調息・致心(調心)」が一つの世界としてとらえられているのである。次に、「非思量」であるが、「非思量」と「思量・不思

第七図（坐禅の要術）



量」の関連は図のように「定」の方面に「非思量」が示されて行くことが「不思量」であり、具体的には「調息」の方となつていくものである。これに対して、「慧」の方面に「非思量」が示されて行くことが「思量」であり、具体的には「致心（調心）」の方となつて示されているものである。ところが、逆に「定」の方面的「調息」、あるいは「慧」の方面的「致心（調心）」を基点とし立場として「非思量」に向うことにややもするとなりやすいところに「默照的」な禅とか「看話的」な禅とかいった見方がでてくる基因があるのであろう。しかしながら、「定」「慧」を立場とせず、「正身端坐」「非思量」を立場とする禅師は、「非思量」という「仏祖の世界」に密着した「正身端坐」をすることにより、「仏祖の世界」そのものといった「要」とそれを正伝する道といった「術」を示そうとされたといえよう。まさに「正身端坐」の坐禅をすることは「仏祖の世界」に対する「要術」であるといえよう。

坐 禅 の 世 界

第八段（本文）

（訓説）

所謂坐禪非「習禪」也、唯是安樂之法門也、究盡菩提之修証也。公案現成、羅籠未到。若得此意、如竜得水、若し此の意を得ば、竜の水を似虎靠山。

当知、

正法自現前、昏散先

撲落。

謂ゆる坐禪は習禪には非ず、唯是安樂の法門なり、菩提を究尽するの修証なり。公案現成、羅籠未だ到らず。得るが如く、虎の山に靠るに似たり。

（字解）

△所謂。所は処が居室といった狭い此のところならば、場

所といった広いその場をさす。謂は「言」と音符の「胃」の合字で、報告すること。直にいうこと。△所謂は広く世にいうところの意。

△坐禪非「習禪」也。習は雛が「羽」を動かして親鳥にまねて飛ばんとすることにより、初めはできないことも同一事

を幾度もまね学ぶ内にできるようになっていくこと。「白」は「自（鼻）」の本字で、学習・練習して息の切れないこと。△習禪は一般に「非」如「習禪人之止觀交修、念想觀別、而修支離」（不能語）もの。すなわち、悟らんがために禪定をおこなうには非ずであるが、先の「非思量」の論法をかりれば、「坐禪習禪也、習禪箇不習禪底、不習禪底如何習禪、非習禪也。」で、「坐禪非習禪也」は、この初めと終りの語句でもって示したものとして見ることもできよう。もし「非習禪」を「非思量」の語句のように受けとるとすれば、「非習禪」は習・不習に「非」ざる處（世界）を「習」うための「禪」、すなわち「非習禪」は「習禪」の肯定でも否定でもなく、いわば禪定を習うか不習かといった吾我による思量の執われから開放された「非習の禪」ということになるであろう。

△唯是安樂之法門也。唯はもと応答の辞で、いまは唯・維に仮借して発語の辞となり、ひとり、ただ、専らの意。是は「日」と「正」の合字で、正しく直きこと。此に通じ、これ・ここ之意。「此」が彼に対するものであれば、「是」は非に対するもので、当年・当月の「当」の意。

樂は「白」が鼓、両側の「夾」が鞞（騎鼓）、「木」がその台を示すところから樂器の意。これより五声八音の総称となり、音樂を聞くのはたのしいことから、心が安らかでたのしいこと。転じて、好むこと△安樂△は身心が落ちつくところに落ちつき安定し、その世界（寂靜）にあって働きが樂としてあること。「聞解」には「身ノ正身端坐シテ、一切ノ動用ヲ離ルルハ安ナリ、心ノ慮知念覚ヲ離レテ、非思量ニ住スルハ樂ナリ、」と身を「安」に、心を「樂」にあてはめている。

法は灘の略字で、平で公平の意の「水」と「塵（一種の神獸）」と、惡を去り善に就かしむ意の「去」の合字から、道理・常道の意。ここでは仏法・正法の意。△法門△は正しい法への出入口の意であるが、『正法眼藏』「仏道」に「吾之は吾有なり、法門は正法なり」とあり、「辨道話」に「大師釈尊、まさしく得道の妙術を正伝し、また三世の如來、ともに坐禪より得道せり。このゆゑに正門なることを、あひつたへたるなり。」とあることよりして、正法と正門の意、または、正しい法が正しく伝わる正しい門の意ともいえよう。

△究尽菩提△之修証也。究は奥深く窮む意の「穴」と音符

の「九」の合字で、物事の淵底を見きわめ推しきわめること。尽（盡）は「夷（火の燃え屑）」と「皿」の合字で、皿の中に何も無く終ること。ことごとくつくす意。△究尽△はきわめつくす意。『正法眼藏』「諸法実相」の劈頭に「仏祖の現成は、究竟の実相なり。」とある。△菩提△はdophiの音訳、仮の道・智・覺のこと。

△公案現成。公は「ム（私）」と背く意の「八」の合字で、私に背き平等に分つ意。転じて、おうやけ・官府・世間等の意。案は「安」と「木」の合字で、体をよせかけて安居する机。また「按（手にておさえ止む意）」に通じておさえる・止む・草稿の意。△公案△は公けの案文。公府の案牘をいう。転じて、仏祖の作略・機縁をおもな課題としたもの。更に仏祖の世界そのもの・本源の意。現は玉の光。「見」の意より、あらわれること、更にあらわれた此時此世等の意。成は「戊（茂）」と「丁（草木盛ゆ）」の合字で、草木の繁茂し尽せること。転じて、広く功卒り業就る意。△現成△は現前成就の意。「聞解」に「現成トハ隠レハセデ、ソコニアルワト云ホドノココロ、」とある。

△羅籠未△到。羅は「皿（あみ）」と「維（ひも）」の合字で、鳥を取る網の意。籠は「竹」と音符の「龍」の合字

で、土を盛る竹器。転じて、鳥籠、中に入つて包まる等の意。未は「木」の中間に「一」を加え枝葉の盛える意を示す。上方に引けば「末」で、木のすえ・こずえとなり、下部に引けば「本」となる。「未」は「非」に仮借して打消となり、「いまだ……ず」の意。到は「至」と音符の「刀」の合字で、彼方（此方）より此方（彼方）へ來り（往き）つくこと。△未到△はまだ到らぬこと。「聞解」には「未」到ハ、上来ノ現成公案ヲ得レバ、一切ノ知見解会、思量分別ノ羅籠ニトリコメラレヌト云義ナリ。」とあるが、逆に一切の知見解会、思量分別といつた羅籠がまだ到らぬのが「現成公案」であつて、現成公案のときには羅籠のないこと、羅籠以前のことと意味しているといえる。

△若得△此意。若是「艸」と「右」から野菜を抜び取ること。汝・如・弱等に通す。ここでは「もし」の意で「ば・なら・たら」と呼応してその意を表す。△此意△は「坐禪非習禪」ということ。

△如△竜得△水。竜（龍）は想像上の動物で、「月（肉）」は身体、「冒」は死転飛動の貌を示して「立（童）」は音符。naga（那伽）といい仏法守護の八部衆の一つとされる。地上・空中・水中に住し雲雨を自在に支配するという

意。未は「木」の中間に「一」を加え枝葉の盛える意を示す。上方に引けば「末」で、木のすえ・こずえとなり、下部に引けば「本」となる。「未」は「非」に仮借して打消となり、「いまだ……ず」の意。到は「至」と音符の「刀」の合字で、彼方（此方）より此方（彼方）へ來り（往き）つくこと。△未到△はまだ到らぬこと。「聞解」には「未」

蛇形の鬼神。水は河水の流動する象形。
△似△虎靠△山。似は「人」と音符の「以」の合字で、人の貌を此と彼と互に相にたること。虎は「虍」と「几」の合字で、「虍」は虎の皮の模様、「几」はその足の象形。靠は「非」から相違うこと、「告」は音符。俗に「よる」と訓み物事によりつくこと。山はやまの象形。

△当△知。△當△知△は当然知るはずであるということ。

△正法△自現前。△正法△は「聞解」に「ココノ正法ト云モ、前ニ本來面目トアルモ、語ハ異ニ理ハ同ナリ、非思量ノ境界ノ言思路絶ヲ指テ、正法ト示サル。」とある。△現前△は目の前にあること。

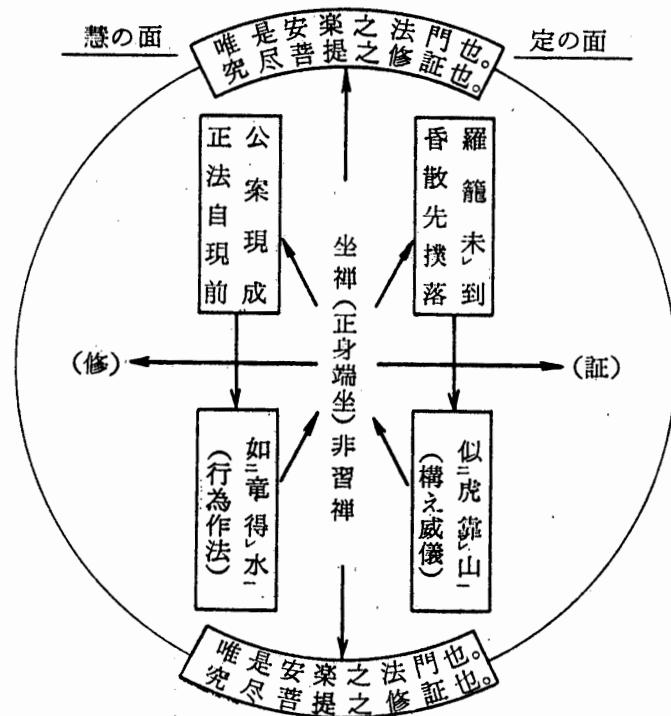
△昏△散先撲落。昏は「氏」と「日」の合字で、氏は低の本字で下る意から、日没して暗くなることで、特に暮より夜にかけていう。転じて、広く不明の意。散は「槭」と「月（肉）」の合字で、「槭」はちりぢりに分る意。故に、きれぎれの肉の意。後世は専ら「ちる」の意。撲は「ヰ」と音符「美」の合字で、手・物で強くうつこと。△撲落△は「聞解」に「撲落ハ、払落ナリ、又撃也トモ注ス、ノソ時ハ、撲落ハバツタリトヲチタナリ、」とある。打ち落されること。

(ノート)

前段において禅師は「正身端坐」の「行い方」を説かれていたのであるが、この段においては、そのような「行い方」によってある正身端坐の世界が、どのような構造内容をもっているかを示している。それを図に示すと第八図のようになる。

この段における「坐禅非習禪」というのは「正身端坐」の坐禅を指すのであるが、この坐禅の世界を「非思量」として開示するかわりに、「非思量」の構造内容をもって示している。すなわち「坐禅」は「安樂」「菩提」への「法門」であるとともに、それを「究尽」した「修」、あるいは「証」としてのものであるとしている。そして、こういった構造内容をもった坐禅の「修」、あるいは「証」は具体的に、まず「修」の面についていえば「公案現成」「正法現前」の働きであり、例えていえば「如^ニ竜得^レ水」といった働き「作法」であるとしている。これに対して「証」の面は「羅籠未^レ到」「昏散先撲落」といった構えにあって、例えていえば「似^ニ虎靠^レ山」といった構え「威儀」であるとしている。しかして、この「修」「証」といった二面に示された「作法」「威儀」とは坐禅に統一され表裏

第八図（坐禅の世圖）



の関係をなしているものとみられる。このことは「作法」が坐禪の「慧」の面に、「威儀」が坐禪の「定」の面になつていることから知ることができよう。

坐 禪 の 力

（訓読）

第九段（本文）

若從^レ坐起、
徐徐動^レ身、
安詳而起。
不^レ忘^ニ卒暴^一。

嘗観、

超凡越聖、坐脫立亡^一、
一ニ任此力^一矣。

況復、

超凡越聖、坐脫立亡^一も、此の
力に一任することを。

況んや復、

拈^ニ指竿針鉗^一之転機、拳^ニ指竿針鉗^一を拈するの転機、拵^ニ拳棒喝^一之証契、未^ニ是^一拳棒喝と拳するの証契も、未

思量分別之所^ニ能解也。

大是れ思量分別の能く解する
豈為^ニ神通修証之所^ニ能知^一所^ニあらず。豈に神通修証の
也。

可^ニ為^ニ声色之外威儀^一、声色の外の威儀たるべし、那

那非^ニ知見之前軌則^一者^一そ知見の前の軌則に非ざる者
歟。

ならんや。

（字 解）

△況復。復は「イ」と音符「复」の合字で、往々て又かえること。ふたたびの意。△況復^レは傍句で、終りの送句「：」者歟。」と結ばれて、上の意を反復している。「歟」は「欠（氣息）」と音符の「與」から語氣を緩くして疑問・推測・未定等の助辞として用いられる。尚、第二段の字解「況乎……者乎」参照。

△拈^ニ指竿針鉗^一之転機。拈は「キ」と音符の「古」の合字で、指にてひねること。拈出といえど、ひねり出すこと。

△指竿針鉗^レは学人に対して古人が示した活作用であつて、「指」については『永平広録』第三の上堂に「拳^ニ俱^ニ脳和尚一指頭禪^一了^一、師乃^ナ云^一、其後俱脳和尚廣^ニ人天^一說法^シ、横說堅說^シ、終無^ニ礙帶^一。云云」と「俱脳和尚一指頭禪」が説かれている。尚、『景德伝灯録』十一・『五灯会元』四等参照。「竿」については『無門閑』第二十二則に「迦葉利竿」の話があり、第四十六則に石霜疎円（九八六〇三九）の「竿頭進歩」の話がある。「加葉利竿」の機縁については『伝光録』第二章に説かれている。尚、

「迦葉利竿」の話の典拠は不明であるが、『伝心法要』の末の方に「豈不見阿難問迦葉云、世尊伝金欄外、別伝何法。迦葉召阿難、阿難應喏。迦葉云、倒却門前刹竿著。(此便是祖師之標也。)」(筑摩書房刊『禪家語錄』I・二八六頁)とある。「針」については『伝光錄』迦那提婆伝に、提婆が「一針」を投じた機縁がみられる。針は専ら縫針・指針等のはりの意、鍼は物を刺すはりの意に用いられる。「鉗」については、文殊の白槌として『從容錄』第一則、また、『碧巖錄』第九十二則等に述べられている。

『正法眼藏』「王索仙陀婆」にもこの機縁が述べられている。「鉗」は鉗砧のこと、「聞解」に「鉗ハ槌ト同シ」とある。「槌」はすばしらの意。転じて、うつ・つちの意。

△転機。機は物の現出するきさしの「幾」から、転じて、はた織具・道具、さらに変化・兆候・心の活動等の意。

△転機は物事のかわるべき機会のこと。心機一転の意。

△挾拳棒喝之証契。△挾拳棒喝も学人を指導する作略で、「挾(払子)」を用いた例として、「聞解」には青原(?)—七四〇)と石頭(七〇〇—七九一)においての「堅立払子」、また、馬祖(七〇九—七八八)と百丈(七四九—八一四)における「堅立払子」等を述べている。禅

師も払子をしばしば用いられている。例えば、『永平広録』にある「修行三祇劫今……」(曹洞宗全書、宗源四五頁下)、「拳、洞山謂雲居曰、……」、「拳、百丈野狐話了云、……」(同書、五三頁下)、「曰、學道須知道得・道不得」(同書、七八頁下)等の上堂語においてなされている。「拳」については『無門閑』第十一に拳頭を堅起した話がある。また、「聞解」には黄檗、そして雪峰(八二二—一九〇八)の古事が述べられている。「拳」の字義は指(手)を巻く意。張る意ならば「掌」とかく。「棒喝」については「徳山(七八二—八六五)の棒、臨濟(?)—八六六)の喝」が有名である。棒にて打ち、一喝にてしかる意であるが、転じて、問答の意もある。『正法眼藏』「仏道」に「慧照大師は、講經の家門をなげすてて、黄檗の門人となれり、黄檗の棒を喫すること三番、あはせて六十拄杖なり。」また『永平広録』卷三に「上堂。拈一機一通透千機万機、演一句一流布千句万句。不仮古仏家風、全彰自己巴鼻。既得怎麼、行棒也。棒殺一千箇百丈野窟、放喝也。喝散三万箇雪峰猢猻隊」とある。△証契の契は「切(割符)」と「大」の合字で、大なる割符のこと。転じて、割符を合わせると・結ぶ・ちぎり等の

意。「証契」でさとりに一致すること。証悟し契当すること。
△未_ニ是思量分別之所_ニ能解也。分は「八」と「刀」から物をわかる意。また、尺度・度数・時・目方等の単位として用いる。別は「另（円で肉と骨とを別別に分つこと）」と「り（刀）」の合字で、彼は彼、此は此と区別して混雜しないこと。辨別のこと。「分別」で事物を区別してわきまえること。また、心で外界を思いはかるこ_ト能は副詞として用いれば、十分にの意。

△豈為_ニ神通修証之所_ニ能知也。為はさるが爪をふり揚げて引搔かんとする象形で、転じて、成す・行う・治む等の意。更に人の為、國の為といった「ため」の意。神は「示」と音符の「申」の合字。示は「二（天）」と「小（日月星）」の合字。故に、天の示現・かみの意。△神通は文字通り神変不思議な通力の意。玄妙奇特な力や働きの意。しかし、禪師は『正法眼藏』「神通」をあらわし「神通は仏家の茶飯なり」と、大鷲（七七一—八五三）のために、仰山（八〇七一八八三）が洗面のしたくをした働きや、香嚴（？—八九八）の点茶といった、なにげない日常茶飯事の當を得た働きを特に「神通」として説かれている。△修証▽は神通を得るための修行と、その結果としての証の意。

△可_ニ為_ニ声色之外威儀。色は「人」と「巳」の合字で、人の顔色のこと。仏教にしては *vijpā* で、五蘊の一で五感によって認識されるもの、存在物のこと。△声色▽は色声香味触法の六塵のこと。外は「夕」と「ト」の合字で、易トを行うには朝がよく、夕に行うは時はそれというところから、よそごとの意。転じて、ほか・そと等の意。威は「女」と音符の「戌」の合字で、姑のこと、のち畏に仮借しておぞるる意となり、更に威光・威嚴等の意。儀は人の貌、物の形の上に就ての、のり・てほんの意。転じて、象る・かたちづくる等の意。△威儀▽は規律に契つたあり方。行往坐臥の四威儀といふ。

△那非_ニ知見之前軌則。那は「邑（邑）」と音符の「用」の合字で、國のこと。副詞として、なんぞ・なにの意。尚、「邑」は「口（國）」と「巴（口で節のこと）」の合字で、人の聚会して住む土地、むら・みやこ・さと等の意。△知見▽は知識と見識。軌は「車」と音符の「九」の合字で、車轍のこと。転じて、轍と轍との間は常に一定して、不変なことより、法則・みち等の意。則は「貝（財貨）」と「刀（分割）」の合字で、等分の意より、人の常法として従いよるべき法則・天理等の意。△軌則▽は不變なるき

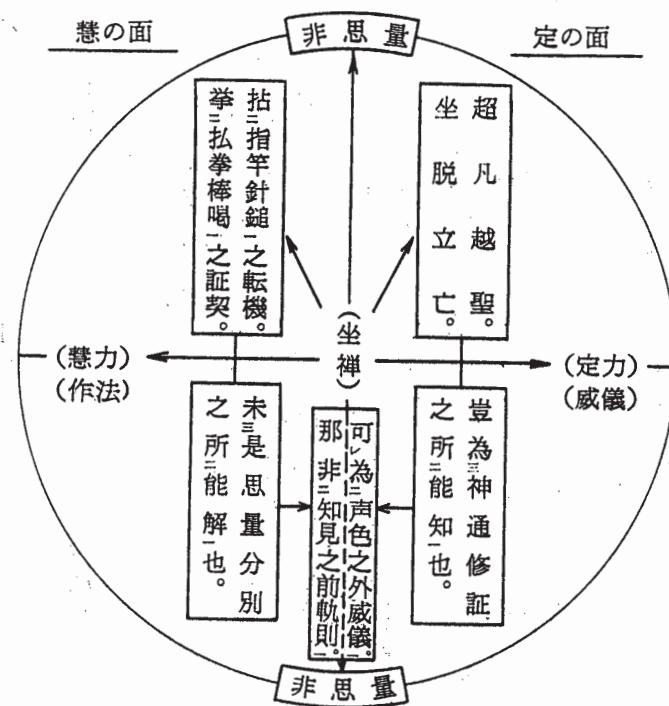
まりの意。

(ノート)

この段では、坐禅の解き方から坐禅の力による実際的な働きを例示して、この「正しい坐禅の威儀作法」を述べられた章の結びとしている。そこで、この段に説かれている坐禅の力による働きを図により示せば第九図のようになるであろう。まず、「超凡越聖」「坐脱立亡」といった坐禅の力によると思われるもの。また、「拈_ニ指竿針鉗_一之転機」「拳_ニ払拳棒喝_一之証契」といった坐禅の力以外に自分の意志力が加わり得ると思われるものも、けつきょくは坐禅の世界である、「非思量」におけるもので共に坐禅の力を出てないものである。ただ、「超凡越聖」「坐脱立亡」の働きは坐禅の力のうち「定」の方面に働き出た力であって、坐禅の威儀・状態を示すもの、また、「拈_ニ指竿針鉗_一之転機」「拳_ニ払拳棒喝_一之証契」の働きは坐禅の力のうち「慧」の方面に働き出た力であって作法・作用を示すものとしてみることのできるものである。それ故、定の方面的「超凡越聖」「坐脱立亡」や「慧」の方面的「拈_ニ指竿針鉗_一之転機」「拳_ニ払拳棒喝_一之証契」は「神通修証」とか「思量分別」とかいったことにはかかわりあいのないこと

『普勸坐禪儀』ノート（その二）（神戸）

第九図（坐禪の力）



『普勸坐禪儀』ノート（その二）（神戸）

で、もっぱら「坐禅の力」によるものであるとしている。このように坐禅の力が「定力」とか「慧力」とかいった「力」となって働き出る中心である坐禪は、いったい何を基盤としているかといえば、それは「可為声色之外威儀」と「那非知見之前軌則」とであるという。いわゆる修証を左右にした「正身端坐」による「威儀」作法と、その世界である思量・不思量に非ざる「非思量」の「軌則」法則が基盤となつて「定」、あるいは「慧」の方面へと坐禅の力となつて働き出しているものとされるのである。

新刊紹介

責任編集 柳田聖山

『禅語録』（『世界の名著』シリーズの続3）

内容（柳田聖山訳）

菩提達摩無心論

六祖壇

祖臨洞山堂

集録

B6判

一七〇〇円

中央公論社
昭和四十九年十月二十日刊

新刊紹介

柳田聖山主編

禪學叢書之一

B5 二八〇〇円
一九七三年三月刊

『校写古尊宿語要』

柳田聖山主編
禪學叢書之二

B5 三六〇〇円
一九七四年二月刊

『高麗禪門撮要』
本編 柳田聖山主編
附錄 禪學叢書之三
法集別行錄節要 金剛經五家解

B5 三六〇〇円
一九七四年二月刊

『四家語録』
附錄 龐居士語録
五家語録 雪峯語録
玄沙大師語録』

（京都）中文出版社